



NTT労働組合退職者の会 高知県支部協議会

通信

2005年10月20日 特集号

 NTT労働組合退職者の会
高知県支部協議会
会長 今井 智

あの日、あの時

いま語り継ぐことが、平和へのみち

いまわしい大戦から六十年……多くの「いのち」「財産」「青春」を犠牲にした波乱の「あの日、あの時」通信省から電通省、電々公社、NTTへと変化する荒波を「語る」!!!
NTTも、戦後生まれの社員らが大量に退職する時期をむかえている。明治・大正・昭和・平成の艱難を「あの日、あの時」と題し特集しました。
いつまでも高齢者をはじめ、一人ひとりの国民の暮らしが平和で「安心・信頼・生きがいあふれる」平穏であることを念じつつ……

（おこわり）①掲載順序は不同です。②一部「見出し」は編集者により付けさせて頂きました。

大東亜戦争 父が徴用で戦地へ

池内 寿子

昭和十七年の初め、体の弱い父が軍人には不的確とされ徴用とやらに駆り出された。日本軍が南方のニューギニアに進出し、戦地の上陸迄に敵の魚雷にやられて、九死に一生を得た父は毎日防空壕を掘っていたそうだ。やがて、父は南方特有のマラリア病に懸かり、内地に送還され横須賀の海軍病院、大村、諫早海軍病院に回送され、ぼろぼろになって昭和十九年に戻ってきた。これがそもその戦争の犠牲の初めと言うべきではないだろうか。

高知市大空襲に

見舞われる

昭和二十年七月四日未明、宵の内から空襲警報が出ていた。父が何か感じたのか、

母に子ども等を新井橋の下に避難するように話してあった。空襲は筆舌に尽くし難いが、長い恐怖の夜が終わって避難していた母達に戻り、無事を慶び合った。翌七月五日、私は出勤すべく五丁目まで出ました。表面りは全壊で焼け爛れ燃えさかる中を、裏町を昔の付属小学校の校庭の、焼夷弾の林立に身の毛もよだち、不発弾には綺麗なりボンが付いて、足の踏み場がないとはこの事だと思いつながら、職場へと急ぎました。気が付いた所が市の高等の前に出ました。南に出ようと思つた所へ、偶然か神の導きか昨夜の宿直組の、大原先生、太田さん他二三人に会い、再会できた慶びと昨夜の労を労い合い、分かれてから

独り、南へ出ていまの中局へ急ぎました。
交換室 最後の姿
まず交換室へ入りました。どうやって何処をどういったか、記憶はありませんが、二三〇〇台の加入者台と、市外台、記録台、案内台それを見守る監督台が、待っていてくれました。
機械室が停止したもので、交換室にはランプ一つ着いてない広い部屋を誰が想像できますか。職場が残っていたということに、心がどれだけ休まったかお判りになりますか。
交換室の入口に、ブレストが山のように積み上げてあり、昨夜の宿直組が最後まであの空襲の最中、忠実に行動された現実を問の当たりにしたとき、絶賛に値すると心から頭が下がりました。私たちはそれぞれのブレスト箱に戻して、更衣室に

あれから六十年

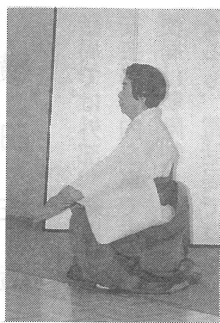
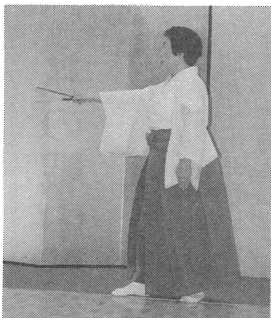
小笠原 良子

昭和二十年七月四日、高知市がアメリカ軍の焼夷弾による空襲。その夜、私は土佐山田郵便局にて宿直勤務、当時内勤は若い女性ばかり、私も青春真っ直中の十八才、私より二十年以上の美人電信係（モルルス符合）にて、受渡し外勤の配達さんに電報を頼む。その女性が高知市内から山田局に通勤していた。どうか家が焼かれておりませんようにと、西の空を見上げては手を合せていた。その光景は戦後六十年の今も私の脳裏から離れない。

高知から通勤の女性、翌日帰宅すると家は全焼。病身な母親を父親が連れ出すのが精一杯で衣類は勿論、家の小道具も何も出せなかつたとの事。山田局は幸いにも空襲は無かったが男と同じ立場で職場を守った。電話交換手は、勤務中は交換

所の方や山部の利用が多く、遠くへの呼び出しや、伝言が多く地域の伝言が来た。その頃、委託局電信電話競技会があり、私は交換証作成という部門に参加し、県内と管内で優勝し東京の全国大会へ出場する。その前日、隣組の二十三軒の方が門出の宴を開いてくれた。その後、農集電話の架設の説明会にも地域の協力が著しく、電話の重要性を認識してくれた。最近もNTTコミュニケーションズの会社からの手紙を持ってこれられ、どうしたら良いか教えて下さいとのこと。情報技術の刻々と進んでいる時代。私も、退職も遠くない減多な回答は出来ないので一六へ尋ね、概要を説明し、本人が一六へ電話して納得して印を付くよう話す。我が家にもパソコンの接続回線アナログからデジタルに変える等生きている限りは学ばず事は続けなければ住めない時代である。

争の悲哀を禁じ得ませんでした。



近況

*現在、こんな事も趣味の一つです。（お立酒）

無線で送受二〇〇〇通

近澤 美義

昭和二十年十二月二日、高知に復員。焼け野原の高知の状況に淋しさを覚え乍ら高知郵便局電信課を訪問。岡林一男（故人）さんらにお世話になり乍ら挨拶。当時の主事徳久要（故人）さんのところで手続。（復員の日）は十二月十日とする旨打ち合わせた。有難い処置。たまたま列車の中で巡り会った徒弟の服部団一郎（故人）のみかんトラックに便乗、故郷甲原へ帰る。丁度母が陰膳中のところへ帰り抱き合せて喜んだ。

を救った実感がある。

ハブニング

①通信中に生文で喧嘩したり注意をしたりするなど無線通信にふさわしくないことを進駐軍に監視され、大阪へ呼び出された

③十二月のボーナスを戴いた為、初めて背広一着買うことが出来た。諸々、なつかしい思い出である。

私の戦中、戦後

濱田 敏喜

「なんつぞね、靖国神社じゃない。九段じゃない、ここへ、この家へ戻らいい」母

「うん、気をつけて行けや」と父

この戦争の将来を、必ずしも明るく展望する予兆の無い昭和十八年八月、休暇を終えて静岡の部隊へ帰る息子に、「生きて帰れ」と母。忠君愛国を美徳の根幹とする明治の母が……である。それは息子の耳朶に焼き付いたまま二十年八月南満鞍山市での終戦となり、靖国は遠のいた。やがて旧関東軍のソ連送りやさやかれ、部隊では兵士名簿を日本へ届けるべく各年次の代表が千山（高野山のような聖地）へ集結するよう指示があり、

無線通信が終戦直後の通信

ようなこともあった。

②ところがいいことも有るもので中野敏美さん（一級）を大阪で獲得して電信課の充実を図ることも出来た偽らぬエピソードもあった。

③十二月のボーナスを戴いた為、初めて背広一着買うことが出来た。諸々、なつかしい思い出である。

終戦の前の私は

元 藤 好 数

グレーン。工場建設に使役された。収容所食事の野菜は、乾燥物が主でリンゴ、キャベツと砂糖大根。緑に飢えた兵達はアカザを茹でて食した。猛烈に青臭かったが味は、ほうれん草に近

い。そのアカザの日本種が、我が家の野菜畑に自生「君の仲間に助けられたんだよ……俺達。昔の事だがね。来年も会おうよ。」「何？鬼が笑うって」

ダッダッダッ……米機・グラマン戦闘機からの機銃掃射を受けた。背中がおかしい。やられたかなと思っ

いた。海軍基地のそばだから、敵機来襲も頻度が高い。少し慣れてくるとグラマン機も見えなくなる。時には操縦者がハッキリ見える低空飛行の攻撃にあつてた。爆弾も落ちた。望楼から至近距離に被戦すると家は吹っ飛び千切れた量の一部分が電線に引っかかる惨状もあった。

これは私が十五才の時、味わった体験である。太平洋戦争の末期は日本の制空権はすでに無く、米軍機の思うがままであった。私が生まれ育ったのは隣の愛媛県松山空港（当時は日本海軍航空基地）周辺の集落である。その集落に農業協同組合があった。その建物の屋根の上に設置された対空監視所は粗末な望楼で、敵機襲来に備えて住民に警報を告げていた。当時は屈強な男は兵隊に取られ、子どもか大人でも五十才前後の人がこの役目を引き受けて

空襲の翌日は路傍に死体も転がっていた。基地の周辺の田んぼには、機関銃の薬莖（弾丸を発射する時に使う弾丸入れ）も落ちていた。戦争とは、戦闘員のみだけでなく、子どもも婦女子を含めた殺戮と破壊が残るもので、他人事ではないものである。

私の戦中戦後

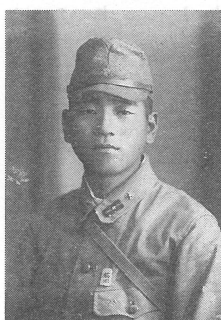
横田 佐造

昭和十七年秋、第一乙種合格、防空兵として福岡甘木高射砲七連隊。翌年、新京の二六八七部隊、終戦時は安東、鴨緑江鉄橋掩護で飛来するB29と交戦、思いがけなく敗戦。

停戦の感極まって男泣き、初めて知った祖国愛。二十年暮れ凍るアムールを渡り、ソ連ブラゴエに入る収容所を転々。二十三年六月舞鶴復員。大阪も戦災、ミズノ寮焼失。田野郵便局奉職。

昭和四十一年秋、電通合理化で安芸電報電話局へ、郵便局では内勤なるも、電

話局では外部、線路宅内課安芸局管内を車で走る。郵便局は職階制もあり、冷飯なるも、電話局ではほかほかで有難かった。工事現場監督に仕え、助手として色々指導を受けながら任務を全う出来て感謝。退職後、脳卒中なりしが幸い小康得て元気ノ



▲当時の写真

募集

- ◎私の戦中、戦後
- ◎戦渦の中での電信電話
- ◎忌まわしい大戦から60年
- ◎平和憲法をめぐる露すしい為政者らの論議

戦後生まれの後輩社員が大量退職を迎えるいまこそ、会員の生死を超えた体験をお寄せ下さい。

原稿の字数：600字程度（写真あれば添付可）

切 り：2005年11月30日（水曜日）までに郵送又はFAX送付願います。

原稿の発表：機関紙「通信」26号（2005年12月）に掲載します。

送 付 先：〒780-0841 高知市帯屋町2-5-11
N T T 労組退職者の会高知県支部協議会
電 話 088-821-3800（火・木曜の午後のみ）
F A X 088-873-3313（24時間受信可）